

論文概要

ジェンダー視点のある協力と外部者の役割に関する考察

-メキシコ・チアパス州を事例に-

国際社会開発研究科 国際社会開発専攻

09MD0163 藤田 久美子

研究の目的と方法

ジェンダーと開発（Gender and Development : GAD : 以下 GAD）アプローチに基づいた開発援助プロジェクトでは、男女の生活状況や発言力、意思決定過程への参画など地域におけるジェンダーの差異を把握し、開発援助プロジェクト実施の際に配慮することにより、男性優位主義、家父長制度や伝統、文化・慣習により抑圧されている貧困女性の主体性の発現を支援する必要があると考えられている。しかし、実際には「ジェンダー＝女性」と認識し、女性のみを開発援助プロジェクトの対象とし、男性を「問題」「障害」として捉えてきた。また、男性と女性の社会的役割やニーズの違いにのみ着眼することで男性を排除してきた。その結果、男性の抵抗、反発を受けたり、男性の無理解によりかえって女性の負担が増えるケースも見受けられ、男性と女性の社会的関係のポジティブな変容に至っていない。社会的に不利な立場にいる女性が発言力や意思決定権を獲得し、女性を取り巻く社会構造を変革していくためには男性を「問題」として捉え、女性のみにも焦点をあてるのではなく、男性の置かれた状況、ニーズも把握し、男性を女性の協働者であると位置づけ、男女共通の課題に取り組むことが重要であると考えられる。そのためには開発援助プロジェクトのすべての過程において男性に働きかけることが重要であり、男女の対話と協働を通してよりよい男女の社会関係を再構築し、男女双方が裨益できる協力を目指すのが真のジェンダー視点のある協力であると考えられる。また、ジェンダー視点のある協力における外部者の役割は女性の主体性発現を支援する過程において男性にも働きかけ、理解と支援を得られるよう促すこと、そして男女の対話や協働を促す「場」を設定することであると仮定する。メキシコ・チアパス州における社会・ジェンダー分析を踏まえた上でジェンダー視点のある協力と外部者の役割について事例を検証し、ジェンダー視点のある協力と外部者の果たすべき役割を考察し、今後の開発援助プロジェクトの取り組みの方向性を検討、提言することが本研究の目的である。

研究の方法は、開発における女性（Women in Development : WID : 以下 WID）アプローチ/GAD アプローチが導入された背景、理論および「モノ」や技術移転中心の開発から「人間」中心の開発アプローチへのシフトを背景にクローズアップされた参加型開発と外部者の役割について文献、先行研究を調査し、開発援助プロジェクトにおけるジェンダー視点と外部者の役割についてどのような議論がされてきたのか把握する。

次に、文献、先行研究、統計データからメキシコ・チアパス州の開発の現状と問題点ならびにメキシコの政府の取り組みを把握し、整理することで当該地域において男女の開発の

阻害要因を明らかにする。

そして、現地調査では、上記プロジェクトが女性の主体性の発現や意思決定過程への参画を支援し、男女が対話を通して協働できる関係を構築するために女性、男性双方にどのように働きかけたのかをプロジェクトに参加した人々の意識の変化に注目しながら聞き取り調査を実施し、分析する。外部者のジェンダー分析およびジェンダー視点の有無がプロジェクトに参加した男女の意識、行動に与えた影響、要因について考察し、今後の展望を示す。

論文の構成

第1章 序論

1-1. 研究の背景と問題の所在

1-2. 研究の目的

1-3. 対象地域の選定

1-4. 研究の方法

1-5. 研究の構成

第2章 開発援助におけるジェンダー視点

2-1. 開発援助の潮流におけるジェンダー主流化への動き

2-2. わが国の政府開発援助におけるジェンダー主流化への取組み

2-3. 国際協力機構におけるジェンダー主流化への取組み

2-4. WID アプローチから GAD アプローチへの転換

2-5. GAD アプローチの問題点

2-6. GAD アプローチにおける男性/性の排除

第3章 女性の「参加」と外部者の役割

3-1. 開発援助のパラダイムシフト

3-2. 参加型開発の概念とアプローチの概略

3-3. 参加型開発とジェンダー視点

3-4. 女性の能力開発と意思決定過程への参画

3-5. 外部者の役割とジェンダー視点

3-6. メキシコにおける参加型開発の取組みと女性の参加

第4章 メキシコ・チアパス州の開発の現状と問題点

4-1. チアパス州の開発の現状

4-2. チアパス州の先住民族の概要と開発上の問題点

4-3. サパティスタ運動と先住民女性の意識と行動の変容

4-4. メキシコ政府の取組み

4-5. まとめ

第5章 ジェンダー視点のある協力と外部者の役割に関する事例分析

5-1.現地調査の視点

5-2.プロジェクトの協力内容および終了時評価結果の概要

5-3.対象地域の概要

5-4.調査日程及び調査内容の概要

5-5.調査結果の概要

5-6.ジェンダー視点のある協力と外部者の役割に関する視点からの考察

5-7.まとめ

第6章 結論と今後の課題

6-1.結論

6-2.今後の課題

論文の概要

1960年ごろから女性の開発への参加の重要性が認識され始め、1970年代にはWIDアプローチが導入された。しかしながら、社会的規範・伝統的価値観に基づく男女の役割分担や力関係、家庭内やコミュニティでの発言力の度合いなど女性を取り巻く社会構造に着目することなく開発事業が実施されたことから女性の経済状況や地位の改善などには至らなかった。そのため、1990年代に入りWIDアプローチを批判的に発展させたGADアプローチが提唱され、多くの開発プロジェクトが実施されたが、女性の問題を扱うことがジェンダー問題を扱うことであるとの解釈の下、男性を「覇権者」「問題」と特徴付けることで、男性を排除した結果、本来GADアプローチが目指す社会的に不利な立場にいる住民男女双方が力をつけ、制度や社会を変革していくことにはつながらなかった。「ジェンダー」と言う言葉自体は、男女両方に共通した平等視点にあるように聞こえるが、実際には、女性の地位向上を目指すというコンテキストにのみに使われ、女性のみを対象としてきた。ジェンダーと言う言葉によって、かえって男性が「男女の社会的・文化的性の違い」から影響を受けているという側面が曖昧化してしまっている。その結果、本来のGADアプローチが目指す社会的に不利な立場にいる住民男女双方が力をつけ、制度や社会を変革していくことにはつながらなかった

一方で、人間中心の開発を重視する方向へ開発援助のパラダイムの転換が起こり、開発プロジェクトに参加型開発の手法が取り入れられるようになった。同時に外部者にも従来の専門家や指導者としての役割とは異なる役割が求められるようになった。社会的弱者の参加を促すためにジェンダー視点を参加型開発にも取り込むことが重要である。そのためには外部者は当該地域の社会・ジェンダー分析に基づき、開発プロジェクト参加当事者やその社会構造の中にいる者が直面する可能性のある問題をあらかじめ予想し、対策をとることで当事者が活動しやすい環境をつくる必要がある。そして、当事者が主体性を育む過程を支援することであるが、全ての活動において外部者は男性にも働きかけ男性も含めた上で合意形成を行っていくことが重要である。

事例調査の対象地域であるメキシコ・チアパス州はメキシコの南東部に位置し、教育レベル、電気・水道の有無、住宅の質、所得などを基にメキシコ政府が算定している疎外指数が全国で最低レベルにある。チアパス州の市町村の 53%が貧困度合いが「非常に高い」、40%が「高い」に分類され、その大部分は農村部であり 10 人に 8 人は貧困状態にあり、特に女性の教育、労働へのアクセスが困難な状況にある (Plan Solidario 2007-2012)。

他方、メキシコを始めラテンアメリカでは植民地時代に形成された家父長制度やマチスモと呼ばれる男性優位主義により依然女性の生き方が制約され、女性の開発援助プロジェクトへの参加を疎外している状況にある。とりわけ先住民女性は「慣わしと慣習」と総称される慣習法により明確な性別役割分業が決められている場合が多い。先住民女性の役割は出産、育児、家事など再生産労働が主であり、独身時は父親に、結婚後は夫に従属する立場にあり、発言権や意思決定権を持たない。幼い頃から女兒は家父長制度に従って家事や兄弟姉妹の世話など母親の助けをすることを義務付けられることから男児に比べ就学率も低く、非識字率も高くなっており、教育の機会を奪われることによりさらに社会的に脆弱な存在となり貧困のサイクルから抜け出せない社会構造となっている。

係る状況下、チアパス州都市部スラム地域における女性の生活向上プロジェクト（以下プロジェクト）では意思決定過程から排除されていることが多い貧困女性がプロジェクトに参加するにはどのようなプロセスが必要なのかを検討し、男性（特に配偶者）の理解と支援がなければ女性の開発プロジェクトへの参加や継続が困難になることからプロジェクトのすべての過程において男性に働きかけることを重視した。また、従来の GAD アプローチでは男女の異なる生活状況やニーズに配慮することを重視しているが、ジェンダーの差異を踏まえた上で男女の持つ共通課題に着眼し、協働を促すことで男女の関係を改善し、問題解決を目指すアプローチはまだ具体的に議論されていないことから、今後の開発援助プロジェクトの取組みの方向性を考える際に男女の抱える共通の問題や共通性に働きかけることの必要性が明らかになった。次に、ジェンダー視点のある協力における外部者の役割において女性の主体性の発現を支援する過程において男性にも働きかけ、理解と支援を得られるよう促すこと、そして男女の対話や協働を促す「場」を設定し、働きかけることの重要性が明らかになった。

以上のことから今後の開発プロジェクト実施上の課題として男女の自信、自尊心の高まりやコミュニケーション能力の向上、意思決定など男女の内面的変化に係る定性的データの重要性が外部者を中心にプロジェクト関係者にしっかりと認識され、日々の活動で実践されることが重要である。また定性的データに係るモニタリング、評価の結果が参加者、外部者共にフィードバックされ、プロジェクト活動を改善していく柔軟性が必要である。

本研究の意義は女性の主体性の発現や意思決定過程への参画を促進する過程における男性への働きかけの重要性を示し、男女の持つ共通性に着眼し、対話の場を通し協働を促すことで男女の関係を改善し、問題解決を目指す取組みの必要性を具体的な事例を通し示したことである。